

橋渡しの最後のチャンス

調査ができる人と、いわれを知る人の力を借りられる今が、後世への橋渡しができる最後のチャンスかもしれない。

地域への愛着を生む

「暮らしが豊かで、信仰心がある」。石仏・石造物が物語る昭和地区の一面で、調査済の地域

のデータと比較して出た一つの成果だ。調査結果は、住んでいる地域への愛着や関心を高めることにもつながる。「若い人へ話を伝えていくためのものができ

た」と、橋渡しの役目もできたのではと小林怜さん(種井)は話す。

住民の力が不可欠

「後で『あそこにもあったのに』とならないよう、かつてを良く知る人に話を聞き、知恵を借り、みんなで力を合わせてやりたい」。秦地区の調査に参加している小西次雄さん(秦)は調査への意気込みを話す。

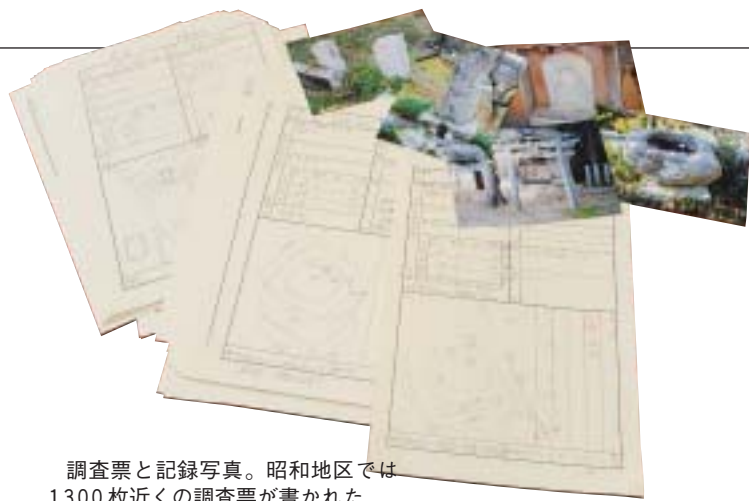
山手も清音も昭和地区も、調査の事情を説明すると、所在やいわれを教えてくださいの人が多くいたそうだ。石部茂昭さん(原)も、「地域の皆さんの手助けに感謝するのと、今まで目にしていなかったが、いわれとか知らないものもあった。調査が進むにつれ、興味津々の心境になった」と。いわれや思いも記録として残せ

ことも暮らしのなかにあった。今は違う。地域内の人のつながり方も変わり、生活が便利になることで、次第に伝承や地域信仰が希薄になった。昭和公民館で原稿をチェックしながら、調査員たちは語り合っていた。

「今が限界かな」

「住民にしかできない調査」。立石さんは言い切る。昭和地区では100人近くの住民が、熱心に調査に携わった。地域をよく知る地域住民の力がなく、この調査は成り立たないのだ。

調査手法は、調査担当者も持っている情報や、石部さんが話



調査票と記録写真。昭和地区では1300枚近くの調査票が書かれた



立石さん(中央)と、一字一字、文字の判読をする調査員



報告書の原稿を校正する調査員



所在地を地図で確認

すように聞き取りなどに頼る部分が大きい。「今はベター、もう少し早ければよりベターだった」。美袋地区を担当した赤木宏平さん(美袋)は、私たちの少し上の世代(80歳代)が所在やいわれなどに詳しく、3、4年前にしていればより良かったと話す。秦地区の調査をする上野知章さん(福谷)も、「ぼくらの世代でやらないとできない」と意気込む。「3世代がいつしよに暮らす家が少なくなった。かつては農業が中心で、石仏や石造物をよりどころにした地域信仰が生活の一部になっていった。それらを上

の世代から下の世代へと伝える

風化する前に

石仏・石造物調査は、地域の歴史をひもとくと同時に、地域社

会のありさまの2つの現状をあり出した。文化財しかり石仏・石造物しかり、先人が長い間にわたり守り続け、地域で温かく見守られてきたからこそ今に残る。調査に同行していると、次の世代に引き継ぐとする調査員の熱い思いを感じずにはいられなかった。「今しかできない」。石仏・石造物のデータを作るためには、調査ができる人と、いわれを知る人の力を借りられる今が最後のチャンスかもしれない。そして、後世への橋渡しができるのも今だろう。記憶と文字が風化する前に――。

